

第六回 喜多流養成会

令和六年八月七日(水) 午後一時始(開場正午)

矢来能楽堂

主催:一般社団法人 喜多流職分会
協力:公益財団法人 十四世六平太記念財団



谷 友規(たにともり)
1994年東京都生
成城大学経済学部経営学科卒業
喜多流職分谷大作の長男
友枝昭世、及び父に師事
1998年「岡田川」子方にて初舞台
2014年「西王母」にて初シテ
2020年「狸々乱」を披く

今後の予定
2024年9月7日 喜多流青年能「熊坂」
2025年11月30日「道成寺」



高林 昌司(たかばやし しょうじ)
1995年京都府生
龍谷大学文学部日本語日本文学科卒業
喜多流職分高林伸三の長男
祖父高林白牛口二、及び父に師事
1997年仕舞「老松」にて初舞台
2001年「狸々」にて初シテ
2021年「狸々乱」を披く

今後の予定
2024年11月9日 喜多流涌泉能「黒塚」
2026年4月11日 喜多流涌泉能特別公演「道成寺」



狩野 祐一(かの ゆういち)
1996年東京都生
法政大学社会学部社会学科卒業
喜多流職分狩野一の長男
友枝昭世、中村邦生及び父に師事
1999年「老松」此吟にて初舞台
2000年「鞍馬天狗」花見にて初子方
2005年「経政」にて初シテ
2022年「狸々乱」を披く

今後の予定
2024年9月7日 喜多流青年能 「三輪」
2026年11月29日「道成寺」



金子 龍晟(かねこりゅうせい)
1998年埼玉県生
東京藝術大学邦楽科別科修了
喜多流職分金子敏一郎の長男
友枝昭世、及び父に師事
2001年「鞍馬天狗」花見にて初舞台
2009年「狸々」にて初シテ



大島 伊織(おおしまいおり)
2008年東京都生
喜多流職分大島輝久の長男
祖父大島政充、及び父に師事
2011年仕舞「老松」にて初舞台
2016年「経政」にて初シテ



大村 稔生(おおむら むのり)
2009年東京都生
立教池袋中学校3年在学中
喜多流職分大村定の孫
友枝真也、及び祖父に師事
2012年仕舞「老松」にて初舞台
2022年「狸々」にて初シテ

今後の予定
12月7日 名曲能の会 仕舞「三輪」

入場券 全席自由席
発売開始日:令和6年6月3日(月)10時~

- ・一般3,000円(税込)
(同伴の中学生以下2名まで無料)
- ・学生1,000円(税込)
(学生証の提示をお願いする場合がありますので必ずご持参ください)
- ・10名以上の団体の方はお問合せください

チケットのお求め・お問合せは喜多能楽堂の電話・Webサイト
または喜多流能楽師まで

喜多能楽堂 03-3491-8813
<http://kita-noh.com/ticket/>
チケットはご予約の際発行された番号を
セブンイレブンのレジでご提示いただきお受け取りください



- ・公演中の途中入場はお断りいたします。
- ・未就学児童のご入場はご遠慮ください。
- ・やむを得ない事情により出演者が変更になる場合がございます。
- ・許可なき写真ビデオ撮影及び録音はお断りいたします。
- ・客席での携帯電話やスマートフォンなど音や光の出る電子機器のご利用はお断り致します。
- ・お席を離れる場合は貴重品お手回り品にご注意ください。盗難紛失についての責任は負いかねます。
- ・係員の指示に従っていただけない際には退場していただく場合がございます。

会場:矢来能楽堂

東京都新宿区矢来町60
Tel:03-3268-7311



地下鉄東西線神楽坂駅下車 矢来口より徒歩2分
都営大江戸線牛込神楽坂駅A1出口より徒歩5分
駐車場はございません。近隣のコイン駐車場をご利用ください。

喜多流養成会番組

舞囃子

巻 絹 狩野祐一

柿原孝則
清水和音
小寺真佐人
杉信太郎

芦 刈 大島伊織

大倉慶乃助
清水和音
藤田貴寛

夕 顔 金子龍晟

柿原孝則
曾和伊喜夫
杉信太郎

狩野祐一
友枝真也
佐々木多門
高林昌司

山 姥 高林昌司

大倉慶乃助
曾和伊喜夫
小寺真佐人
杉信太郎

雲雀山 大村稔生

大倉慶乃助
曾和伊喜夫
藤田貴寛

舞囃子

…休憩十分…

黒 塚 能

村瀬慧
矢野昌平

大倉慶乃助
清水和音
小寺真佐人
藤田貴寛

大島輝也
友枝真也

狩野祐一
佐々木多門
内田成信
金子敬一郎

…休憩二十分…

ご挨拶

皆様には平素よりお力添えを賜り、心より御礼申し上げます。令和元年より流儀若手の研鑽のために始めました「養成会」は、皆様のご理解とご助力により、コロナ禍でも途切れさせることなく、今年で六回目を迎えることができました。

六年と申ししましても、十代、二十代の若い能楽師にとっては、一年一年が心身の成長という面で、そして芸の基盤を培う上で、大切な歲月です。変化の著しい現代社会において、古典芸能の意義やあり方を模索する一方で、地道な稽古の積み重ねを疎かにせず、変えるべきこと、引き継ぐべきことを見極めつつ、若い力を育成してまいります。

「新しい日常」の中で、未熟ではありますがありますが若さ溢れる舞台の皆様にお届けすべく、喜多流一丸となつて努力いたします。引き続きお力添えを賜り、お見守りくださいますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

喜多流宗家預かり 友枝昭世

喜多流職分会

雲雀山(ひばりやま)

奈良時代藤原南家の藤原豊成(横佩大臣)は讒言を信じて自身の娘、中将姫を大和国雲雀山で殺させようとしたが、従者はあまりに不憫で殺す事ができず、山中に庵を作つて中将姫を隠し置いた。乳母の侍従は草木の花を里に出て売つて姫を養っていたところへ、懺悔を信じたことを後悔した豊成が噂を聞いて雲雀山を訪ね、姫を殺そうとした事を悔い、父子再会して奈良の都へ帰っていくのだった。舞囃子では乳母の侍従が花を売るために舞い謡う場面が描かれる。

山姥(やまんば)

百万山姥の名を持つ女芸者の一行が、善光寺への旅の途中、越中越後の境にかかる。未だ日が高かったはずがにわか暮れて、不審に思いつつも巡り合った女に宿を借りる。百万山姥は山巡りをする鬼女・山姥の歌謡を芸としていたが、実は宿を借りたこの女こそ本物の山姥であった。山姥はそのことを明かし、再び会おうと告げて姿を現す。やがて山姥は本来の姿で一向の前に再び現れる。荒涼とした山中で山姥の所望によって、百万山姥は謡を謡い、山姥はその謡に合わせて自身の山巡りの様子を舞ってみせる。舞囃子では、クライマックスのこの山姥の山巡り、ある時は人を助け、四季の移ろう輪廻の巡りと共に険しい山々を巡る、山姥の迫真の姿が描かれる。

黒塚(くろづか)

熊野那智大社の東光坊祐慶ら山伏が諸国行脚の途中、奥州安達原で日暮れて一夜の宿を求め。主の女は糸を操り、身の上の儂さを嘆き、夜更けの寒さが増すと裏山へ薪を採りに行く。閨の中は覗くなど念を押して中入りとなる。しかし見たくなつた供の者が約束を破り、閨を覗くとなると、そこには死骸の山が。驚いて逃げ出した祐慶らに激しく鬼女が襲いかかるが、ついに祈り伏せられ消え去るのであった。黒塚は福島県二本松市にある鬼女の墓、及びその鬼女の伝説。安達が原に住み、人を食らっていたという「安達が原の鬼女」として伝えられている。黒塚の名はこの鬼女を葬った塚を指すが、現在では鬼女自身をも指すようになっている。

曲目紹介

巻絹(まきぎぬ)

三熊野神社へ奉納する巻絹を携えた都の男は熊野に着いてまず音無の天神へ参る。そこで冬梅の香を楽しみ、一首の歌を詠んでいた為遅参しよう。官人はその男を縛つて罪を責める。すると、音無の天神の霊が乗り移った巫女が現れ、昨日自分に歌を捧げた者だと言い男の縄を解くよう命じる。臣下はこのように男に歌が詠めるわけがないと疑うので、巫女は男に上の句を、巫女が下の句をつけて証明し縄を解く。舞囃子ではその後巫女が和歌の徳や神仏の威力を説き、祝詞を上げ神楽を奏するうちに神がかりとなり、狂い舞つて舞の手を尽くし、時が経つと神気が離れて本性にかえる場面が演じられる。

芦刈(あしかり)

貧困に窮し夫婦別れたの妻が京都のある貴人の乳母となり、相当の生活ができるようになったのでその主家の下人を伴つてかつて夫婦で暮らしていた難波の浦へ夫を探しに探訪する。夫はさらに零落して行方知らずとなつていたが、ちょうど来合せた芦を売る男がかつての夫であったことがわかり、再開を喜びやがて打ち連れて京都へと上つていくのだった。舞囃子では芦を売る男が夫であったことが判明した後、身なりを整え夫婦再会の喜びの舞を舞い、伴つて帰る終曲の部分が演じられる。

夕顔(ゆうがお)

八幡宮参詣のため都に上つた僧が五条の辺りを通りかかると、和歌を吟ずる女の声が聞こえた。僧の問いにその女は「ここは何某の院、もと融大臣の住まれた河原で後に夕顔が物の怪に命をとられた所」と答える。さらに、光源氏と夕顔の出会い、物の怪に憑かれ露と消えた儂い夕顔の身の上を語り、自分こそ夕顔だと告げて姿を消す。その夜、僧が弔いをする夕顔の霊が在りし日の姿で現れる。舞囃子では弔いを受け成仏することの喜びつつ静かに舞い夜明けとともに姿を消す場面が上演される。